

3・11後 を生きる

伝え続けたい

福島県南相馬市

(4~5月)



四月から五月にかけては福島県南相馬市で母親支援などにあたる番場さち子さん(五十)の「写真」が執筆する。

福島の人々は、人生や地域の将来像を描けず、今も深い苦悩の中にある。「放射能がうつる」など、心ない中傷にも苦しめられてきた。

南相馬市では今月予定されていた小高区の避難指示解除が先送りとなっている。除染効果などへの

住民の気持ちで

住民の不安が強いためだ。自主避難している母親たちからは、地元に残った母親との間に溝ができ「今さら帰れない」という声も出ているという。震災後「ベテランママの会」を結成した番場さんは、放射能の勉強会やサークル活動などを通じて、住民の気持ちに寄り添ってきた。

「今になって泣けるようになった、という声も聞きます。私自身もそう。平常心が戻ってきて泣けるのか、疲弊しているのか自分で分からない」

連載では、3・11後、南相馬にとどまる決意をしたときを振り返り、活動の現状をつづっていく。

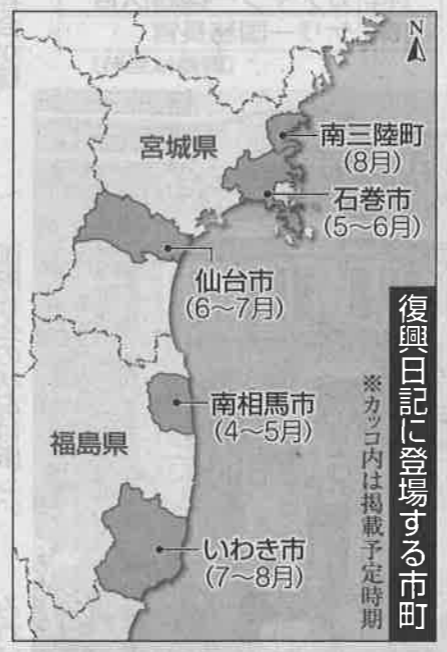


太田美智子さんが管む「いしのまき寺子屋」の縫いぐるみは子どもたちの気持ちを受け止めてほるほるになった。2014年2月23日、宮城県石巻市で

被災地の今 息長く

東北復興日記

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から五年が過ぎました。被災地の復興の進み方は一様ではありません。心の傷も深く長く残ります。本紙では東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが共同で進める「結核プロジェクト」の協力を得て、二〇一二年八月からエッセー「東北復興日記」の連載を続けてきました。五年の節目に「東北またまた復興日記」とタイトルを改め、息長く被災地の今を伝えていきたいと思っています。再スタートにあたり、今後各二回ずつ執筆する予定の女性たちに地域の現状などを聞きました。



仙台市

(6~7月)



六~七月は東北の水産物や農産物を使った商品開発や販路開拓などの支援をしている社団法人IkiZen(仙台市)代表理事の齋藤由布子さん(四十)の「写真」が執筆する。

管理栄養士の齋藤さんが東北の食文化の価値にあらためて気付いたのは震災後の避難所だった。生のマグロをやっと食べられた時の人々のうれしそうな表情が胸に刻まれた。その後、観光や産業の復興を支援する拠点施設「東北ろっけんパーク」で勤務。当初は物産市をやっ

福島県いわき市

(7~8月)



「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」で畑を訪れたボランティアはこれまでに1万5000人に上る=福島県広野町で

七月から八月にかけては、福島県いわき市の「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」代表の吉田恵美子さん(五十)の「写真」が執筆する。

いわき市や広野町などで、有機栽培で和綿を作るプロジェクトは二〇一二年、始まった。東京電力福島第一原発事故で食べ物を作ることが諦める農家が続出し、耕作放棄地が急速に拡大していた。都会からも多くのボランティアの助

綿の手紡ぎ 育て

力も受けながら、二十三万所、二・六段で栽培。Tシャツや人形など新たな「特産品」が生み出されてきた。今春、五回目の種まきをする。

今年は、スピンドルという道具を使った綿の手紡ぎを広めていきたいという。広野町では女性たちのグループが始める。いわき市には、富岡町から避難してきた人々が集う「みんなの畑」と名付けられた綿畑もある。ここでも手紡ぎを伝えていきたいという。吉田さんは「地域の手仕事として育てていきたい」と話す。連載では、和綿が地域の未来を広げていく道のりがつづられる予定だ。

宮城県南三陸町

(8月)



八月には宮城県南三陸町在住の東北学の研究者、山内明美さん(四十)の「写真」が執筆する。

南三陸町は、林業やFSC、養殖業でASCという国際認証を取得した。どちらにも、持続可能な経営をしていることが国際的に認められたことを意味する。海と山の両方で「お墨付き」を得た町は、世界でも前例がないという。



総合学習で木と親子、宮城県南三陸町



「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」の報告会が5月10日午後2時半から、東京都渋谷区神宮前5の地球環境パートナーシッププラザで開かれる。参加費無料。申し込み、問い合わせはNPO法人ザ・ピープル=☎0246(92)4298=へ。

も、被災地から出店を募るのは難しい状況だった。

復興予算が投入され、専門家も外部から支援に訪れたことで、震災前よりレベルの高い特産品を開発できた業者も出てくる一方で、小さな事業所は取り残された。そんな事業所を支えるためにIkiZenを設立した。

現在、さまざまな事業所の商品を詰め合わせたお中元用のギフトなども準備している。その場所に行ってみたくなるような商品を開発していきたいという。

高島南相馬市

(4~5月)



四月から五月にかけては福島県南相馬市で母親支援などにあたる黄嶋さち子さん(まき)が執筆する。
福島の人は、人生や地域の将来像が描けず、今も深い苦悩の中にある。「放射能がうつる」など、心ない中傷にも苦しめられてきた。
南相馬市では今月予定されている小高区の避難指示解除が先送りとなっている。除染効果などへの

住民の気持ちで

住民の不安が強いためだ。自主避難している母親たちからは、地元に残った母親との間に溝ができ「今さら帰れない」という声も出ているという。震災後「ベテランママの会」を結成した番場さんは、放射能の勉強会やサークル活動などを通じて、住民の気持ちに寄り添ってきた。
「今になって泣けるようになって、という声も聞きます。私自身もそう。平常心が戻ってきて泣けるのか、疲弊しているのか自分でも分からない」
連載では、3・11後、南相馬にとどまる決意をしたときを振り返り、活動の現状をつづっていく。



太田美智子さんが営む「いしのまき寺子屋」の縫いぐるみは子どもたちの気持ちを受け止めてほろほろになった。2014年2月23日、宮城県石巻市で

被災地の今息長く

復興日記

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から五年が過ぎました。被災地の復興の進み方は様々ではありません。心の傷も深く長く残ります。本紙では東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが共同で進める「結核プロジェクト」の協力を得て、二〇一二年八月からエッセー「東北復興日記」の連載を続けてきました。五年の節目に「東北はまだ復興日記」とタイトルを改め、息長く被災地の今を伝えていきたいと思っています。再スタートにあたり、今後各三回ずつ執筆する予定の女性たちに地域の現状などを聞きました。



復興日記に登場する市町 ※カッコ内は掲載予定時期

月)



の水産物や農産物を使った路開拓などの支援をKitchen(仙台市)布子さん(まき)が執筆する。
藤さんが東北の食文化で気付いたのは震災後のマグロをよつと食のうれしそうな表情がの後、観光や産業の施設「東北ろっけんパーク」初は物産市をやった

福島県いわき市

(7~8月)



「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」で畑を訪れたボランティアはこれまでに1万5000人に上る=福島県広野町で

七月から八月にかけては、福島県いわき市の「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」代表の吉田恵美子さん(まき)が執筆する。
いわき市や広野町などで、有機栽培で和綿を作るプロジェクトは二〇一二年、始まった。東京電力福島第一原発事故で食べ物を作ることが諦める農家が続出し、耕作放棄地が急速に拡大していた。都会からも多くのボランティアの助け

綿の手紡ぎ育て

今年、スピンドルという道具を使った綿の手紡ぎを始めていきたいという。広野町では女性たちのグループが始める。いわき市には、富岡町から避難してきた人々が集う「みんなの畑」と名付けられた綿畑もある。ここでも手紡ぎを伝えていきたいという。吉田さんは「地域の手仕事として育てていきたい」と話す。連載では、和綿が地域の未来を広げていく道のりがつづられる予定だ。



「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」の報告会が5月10日午後2時半から、東京都渋谷区神宮前5の地球環境パートナーシッププラザで開かれる。参加費無料。申し込み、問い合わせはNPO法人ザ・ピープル=0246(92)4298へ。来月10日、報告会

宮城県石巻市

(5~6月)



五月から六月にかけては、東日本大震災圏域創生NPOセンター(宮城県石巻市)の太田美智子さん(まき)が執筆する。
子どもたちも、津波で家族や家を失うなど、深い心の傷を負っている。太田さんはそんな子どもたちの居場所「いしのまき寺子屋」を運営している。現在は十人ほどが通う。まだ仮設暮らしの子もいる。

子どもたちを支えて

震災直後に避難所にいる時から、子どもたちに、絵を描いたり、遊んだりさせることで心を解放させる取り組みが続いてきた。
「子どもたちが元気に動いている姿が、私たちが立ち上がり、前に進むエネルギーになる。子どもの心を支えることで、互いに回復し合うことができた」
一方で、心の支援を受けることができなかった子どもたちの傷は尾を引いている。宮城県の不登校の子の割合は全国でも高く、石巻市は県内で一番高い。太田さんは子どもの心の支援の大切さを訴えるため、この五年間の取り組みを研究者らと一冊の本にまとめる準備を進めている。



総合学習で木と親しむ子どもたち。1月20日、宮城県南三陸町で(山内明美さん提供)

宮城県南三陸町

(8月)



八月には宮城県南三陸町在住の東北学の研究者、山内明美さん(まき)が執筆する。
南三陸町は、林業やFSC、養殖業でASCという国際認証を取得した。どちらも、持続可能な経営をしていることが国際的に認められたことを意味する。海と山の両方で「お墨付き」を得た町は、世界でも前例がないという。

経済成長と違う幸せ

「漁業や林業を営む人々にとっては、海に生かされ、山に生かされてきたことにあらためて気付いた五年間だったと思います」。家は流され、山だけが残った林業の人もある。津波で流された事業所はそのまま廃業していき、働く場所は非常に限られる。「山や海が絶望の中の希望。国際認証は、これを大事にしていきます」という宣言なんです。
沿岸部では防潮堤など巨大公共事業が進む。一方で、震災後、移住してきた若い人々が自分たちで家をつ造ったりもしている。「経済成長」とは異なる幸せの形も模索しながらの連載となる。

お断り 「坂本充孝のふくしま便り」「全電源喪失の記憶」は休みました。